



Title	The Return of the Native : Clym の顔を読む
Author(s)	伊藤, 佳子
Citation	Osaka Literary Review. 2004, 43, p. 73-86
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25192
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

The Return of the Native

— Clym の顔を読む —

伊藤 佳子

The Return of the Native は、物語の最初と最後の光景が際立ったコントラストをなしている。冒頭では闇に包まれたレインバロウに、ギリシャ的異教徒、Eustacia の、かがり火に照らし出されたシルエットが浮び上るのに対して、結末部では彼女の死後、同じレインバロウで、キリストのイメージと重なる Clym の、説教する姿が描かれているからである。さらに、前半では古典古代への言及が、後半では聖書への言及が多く見られることから、この作品は、異教精神の敗北とキリスト教的良心の勝利を謳ったものとする John Paterson の解釈は、もっともだと思われる。

この作品は最初の構想では、「三一一致の法則」に則った古典悲劇の五幕構成をとっており、結末部で Thomasin は未亡人として余生を送り、Venn は荒野のいずこともなく立ち去ることになっていたが、作者は雑誌連載のある事情のため、最初の意図を変えざるをえなかったことを、第六部「後日物語」の脚注に記している。しかし、第六部のメイポール・ダンスの描写における、異教的なものがまだエグドンには残っているという叙述は、異教精神の敗北ということになるのだろうか。

Hardy は、多感な青春時代に Sophocles や Aeschylus の劇を数多く読み、ギリシャ神話やギリシャ悲劇に並々ならぬ関心を示していた。¹ またこの作品の執筆直前、それまでに読んだ書物からの抜粋をまとめた 'Literary Notes' を作成し、² そこにギリシャ人の道德観、宗教、人生観について数多く書き留めている。

David J. De Laura は、Hardy の三つの 'modern' な小説、*The Return*

of the Native、Tess of the d'Urbervilles、Jude the Obscure に共通するテーマの一つとして、ヘレニズム的人生観が打ち出され、それを支持する態度が見られると述べるとともに、Hardy の考えるギリシャ的理想は、さまざまな資料をもとに独自に形成されたものであるが、特に Matthew Arnold や Walter Pater の影響を指摘している。³

この三作品ではヘレニズム的な生き方、人生観がさまざまな形で言及されている。もっとも *The Return of the Native* では、「ヘレニズム」という概念はそれほど明確ではないが、*Tess of the d'Urbervilles*、*Jude the Obscure* に至ると、ヘレニズム的なものとヘブライズム的なものが、より鮮やかな対比を見せているのである。

本稿はこの三作品で展開される、「ヘレニズム」と「ヘブライズム」をめぐる言説を辿るなかで、Hardy の「ヘレニズム」の概念がどのようなものであるかを明らかにすることにより、*The Return of the Native* の結末部の解釈に新たな光をあてようとするものである。

I

エグドン・ヒースで生まれ、「少年時代から荒野にすっかり溶け込んでしまっていた」⁴ Clym は、村人の間では神童の噂が高かった。その彼が長じて、母の出世の夢を一身に背負ってパリへ出かけ、そこで宝石商の修業を積むのだが、この「素朴で禁欲的な荒野の若者」(186) は、虚飾に満ちた都会生活に耐えきれず、エグドンの自然に安らぎを求めて帰郷する。その Clym の顔の描写に注目したい。

The face was well shaped, even excellently. But the mind within was beginning to use it as a mere waste tablet whereon to trace its idiosyncrasies as they developed themselves. The beauty here visible would in no long time be ruthlessly overrun

by its parasite, thought,... His countenance was overlaid with legible meanings. Without being thought-worn he yet had certain marks derived from a perception of his surroundings, such as are not unfrequently found on men at the end of the four or five years of endeavour which follow the close of placid pupilage. He already showed that thought is a disease of flesh, and indirectly bore evidence that ideal physical beauty is incompatible with emotional development and a full recognition of the coil of things. (156)

内面の奮闘が、秀麗ともいえる彼の整った顔立ちを餌食にしており、彼は、「思索は肉体の病」であり、「理想的な肉体美は物事の煩わしさについての十分な認識とは両立しない」ことを証明している。さらに次のパッセージは、彼の顔が表象するものを述べている。

In Clym Yeobright's face could be dimly seen the typical countenance of the future. Should there be a classic period to art hereafter, its Pheidias may produce such faces. The view of life as a thing to be put up with, replacing that zest for existence which was so intense in early civilizations, must ultimately enter so thoroughly into the constitution of the advanced races that its facial expression will become accepted as a new artistic departure. People already feel that a man who lives without disturbing a curve of feature, or setting a mark of mental concern anywhere upon himself, is too far removed from modern perceptiveness to be a modern type. Physically beautiful men – the glory of the race when it was young – are almost an anachronism now; and we may wonder whether, at some time or other,

physically beautiful women may not be an anachronism likewise.

The truth seems to be that a long line of disillusionive centuries has permanently displaced the Hellenic idea of life, or whatever it may be called. What the Greeks only suspected we know well; what their Aeschylus imagined our nursery children feel. That old-fashioned revelling in the general situation grows less and less possible as we uncover the defects of natural laws, and see the quandary that man is in by their operation. (185)

Clym の顔には、未来の典型的表情がかすかに認められる。来たるべき時代には、古代ギリシャにおいてあれほど旺盛であった「生存に対する意欲」は、人生は耐えるべきものだという人生観に取って代わられるにちがいないのである。肉体的に美しい男は、今ではほとんどアナクロニズムになっており、顔面に歪んだ曲線が刻まれ、心労の跡をとどめている Clym のような顔こそ現代的タイプなのである。肉体的に美しい男はアナクロニズムだという言説は、思索と美とは相補的ではなく、むしろ相互破壊的であるということであるから、Pater の審美的ヘレニズムの否定的エコーを響かせていると思われる。⁵

ところで、肉体美の称揚はアナクロニズムだというのは、小説冒頭の風景美に関する叙述—人類が若かりし頃には、ギリシャ・ローマ時代のような華やかさ、明るさ、輝かしさを持つ風景が理想美とされたのであるが、今やそれは新しい美に取って代われようとしている—とエコーし合っている。エグドンは、「夜の近親者」(33)と言われるほど、その黒々とした野面は暗く深い趣を持っており、荘厳さすら感じさせる。この「抑制された荘厳美」(34)こそ、現代的感情に訴えるものを持つのである。

さらに、未来の気質のエンブレムとなっている Clym についての、「彼こそ荒野を知り抜いている者であり、彼には荒野のさまざまな風景や香気が染

み込んでおり」(191)、「彼の人生観は荒野によって彩られている」(191)という叙述から、エグドンと Clym は類似性を持つというより、本質的に同一のものと見なすことができよう。

それではどのような時代が到来しつつあるのだろうか。古代ギリシャでは、あの古風な酒神祭騒ぎは、国家的行事として大々的に行われたように、「生存に対する意欲」は旺盛であったが、時代の移り変わりとともにものの見方も変化し、今ではヘレニズム的人生観は永久に追放されてしまった感がある。未熟なギリシャ人に比べて、知性の向上した現代では、われわれがダーウィニズムを初めとする自然の法則の欠陥を暴露し、人間がその法則の作用によって陥っている窮地を見ると、「生存に対する意欲」は維持しがたくなっているというのである。このことから、Hardy の「ヘレニズム」の概念には、反知性主義が重要な要素となっていると言えよう。⁶

産業革命が物質的繁栄をもたらす一方で、Charles Darwin や Charles Lyell などが提唱した自然科学の新しい理論は、伝統的なキリスト教教義に疑問を抱かせ、価値観を大きく揺がせた。人々は信仰の衰退とともに、「憂鬱」という「現代生活の奇妙な病」⁷にとりつかれ、彼らの経験した精神的苦悶は、特に知識階級にあっては想像を絶するものがあった。次の二つの詩は、時代の苦悩をよく映し出していると思われる。

Arnold の詩、‘Resignation’では、芝土も丘も川も岩もさびしげな空も、「喜んでいよりむしろ耐えているように思われる」⁸と歌われ、Hardy の詩、‘Nature’s Questioning’では、池や野原、羊の群れ、ただ一本立っている樹は、「学校で押し黙って席に着いている、叱られた子供たち」⁹にたとえられている。人もまた、じっと耐えているこれらの自然物の姿から、生の苦難に耐え忍ぶことを学ばべきだというのである。Clym の顔にはこのような時代思潮が刻印されており、「悲しすぎる色合い」(34)を帯びたエグドンの風景は、時代の知的風景そのものであろう。

II

それでは、ヘレニズム的人生観がヘブライズム的人生観に取って代わられるということは、物語のプロットの次元で考えると、どうなるだろうか。帰郷した Clym が、故郷の人々を教化するために立てた教育計画の協力者として選んだ女性が Eustacia である。彼女は、「夜の神秘に満ちた異教徒の眼」(89)を持ち、その口は「しゃべるためよりも震わせるために、震わせるためよりもキスするために作られている」(90)と思わせるほど官能的であり、唇の線はギリシャやローマの大理石像に見られるものと同じである。このギリシャ的異教徒、Eustacia はエグドンの片田舎で、物理的かつ精神的閉塞感を味わっており、自己内部に抑圧された情熱のはけ口を見出せず、鬱屈した気持で日々を過している。

彼女の考える人生とは、「音楽や詩や情熱、戦争、そして世界の大動脈のなかで起こっているあらゆる鼓動や、脈拍」(290)である。彼女は Clym が表象するもの、つまり、「社交界の中心地であり、その渦巻」(130)であるパリ故に、初めて会ったとき、彼が金色の後光に包まれているように見え、エグドン脱出の夢を彼との結婚にひそかに託す。彼女は、「もしも華やかな町で貴婦人みたいに暮して、自分の思い通りに自分のことをやっていけるなら、一生のうちの皺だらけの半分はもういらない」(115)と豪語するほど自己主張が強く、以前の恋人、Wildeva を自分に惹きつけるために合図のかがり火を焚いたり、Clym を一目見たさに無言劇で代役を買って出て彼の家に乗り込むように、自己を突き動かす情熱や本能に従って行動する女性である。

彼女が外出時に携えている砂時計は、時の流れの物質的表現であり、月食の夜の、Clym との逢瀬では半ば欠けた月を指して、「何と私たちの時間がどんどん過ぎていくのでしょうか、／」(214)と、時の経過を絶えず意識する。また Clym の母が二人の交際を快く思っていないことを知っても、「時々違って、明日のことなんか気にしない」(264-65)と、*Carpe diem* の生き方を

示す。さらに、Clym との結婚生活が破綻したとき、ピストル自殺を企てようとして阻止され、「死にたいのに死んではいけないの？」(339) と口走る。キリスト教倫理では自殺は非難されるが、異教徒は罪惡視しないのである。¹⁰ このように、彼女は容姿のみならず気質、考え方においてもヘレニズム的なものを体現する人物であると言えよう。

官能的魅力にあふれ、「魂は炎のような色」(89) をした Eustacia と対照的に、Clym の彼女への愛は、「ローラに対するペトルルカのそれと同じく、清純なもの」(216) である。彼はパリでの虚飾の生活を捨て村人の教化という愛他主義に生きようと、その夢を実現するための手段として Eustacia との結婚に踏み切る。しかし、考え方も気質も対極にある二人の結婚生活は、Clym の母の不慮の死によって危機に瀕する。激しい口論の末、家出した妻が堰に落ちて助からなかったとき、Clym は自分こそ母と妻の死の大きな原因だとの思いから、自己を激しく責めさいなむ。

彼は、「人生は、たくさんの人たちが我慢しなければならない憂鬱の原因だ」(163) と語り、毎朝目が覚めると、「被造物全体がうめき、産みの苦しみを続けている」(193) のが分かると言うように、人生を苦難に満ちたものとする見方において、ヘブライズム的なものを体現する人物であると言えよう。彼は、教育計画の挫折、結婚生活の破綻という試練を経て、二年半前の火祭りの日に Eustacia が立っていたレインバロウに、村の説教師として立つのである。

Clym は生き残ったとはいえ、彼が払った代償は余りに大きい。さらに彼の説教を聴く人たちの受け止め方は肯定、否定相半ばしており、彼が顔につけている日よけは、彼が人間性の判断力に欠けることを示唆するものとも考えられる。¹¹ Clym についてのこのような曖昧な表現は、キリスト教の全面的勝利を示すものとは言い難く、五月祭で、異教的なものがエグドンの地にはまだ残っていることが強調されていることこそ注目すべきである。

ところで *Culture and Anarchy* において、「ヘレニズム」を、神の意志

に従って人間を厳しい道徳的訓練の下に置こうという「ヘブライズム」と対比させたのは、Arnold である。彼は当時の英国社会の混乱を目の当たりにして、将来の英国社会の担い手たるべき中産階級が、物質主義や偏狭な清教主義を固守してギリシャ的要素に欠ける点を憂慮し、彼らの人間性をもっと完全に発達させるために「教養」を説いた。Hardy の後期作品に顕著である「ヘレニズム」と「ヘブライズム」の対比には、Arnold の影響が窺えよう。

このように見てくると、*The Return of the Native* において、「ヘレニズム」と「ヘブライズム」の対比は、主要人物の性格描写のみならず、テーマ的内容の発展においても中心的概念になっていると思われる。¹²

III

では、ヘレニズム的なものはテキストのなかでどのような形で言及されているだろうか。結婚後、教育計画を速やかに実行に移すため、深夜まで読書に励んだ結果、眼を悪くした Clym はエニシダ刈りの仕事を始める。パリ行きの夢は実現せず、荒野のあばら屋に閉じこめられたままの Eustacia は、憂さ晴らしに東エグドン村での野外遊び、「ジプシー祭」に出かけ、そこで偶然 Wildeve に出会う。“A whole village-full of sensuous emotion, scattered abroad all the year long, surged here in a focus for an hour.... For the time Paganism was revived in their hearts, the pride of life was all in all, and they adored none other than themselves.” (269)

村中にあふれる感覚的興奮のなかで繰り広げられるジプシー・ダンスは、肉体賛美と自己崇拝そのものの行事であり、Eustacia は踊りの輪の「熱帯の感じ」(271) と、「北極圏の極寒」(271) に包まれた Clym との結婚生活の相違をはっきり意識する。「異教思想」がエグドンの人たちの心の中に蘇るということは、その背後にキリスト教信仰の衰退が示唆されており、¹³ 彼

らが結婚式や葬式以外、教会へ足を運ぶことがほとんどないことが、それを如実に物語っている。

また冬の初めに、レインバロウでかがり火を焚くエグドンの風習は、「ドルイド教の儀式の直系の子孫」(45)であり、再び巡りきた季節が暗闇と死をもたらすことに対する「人間の本能的な抵抗の行為」(45)である。この火祭りで発輝される異教的エネルギーは、結末部のメイポール・ダンスでも遺憾なく発揮される。Thomasin の家の前の草地に立てられたメイポールには、花輪や花束が飾りつけられている。

The instincts of merry England lingered on here with exceptional vitality, and the symbolic customs which tradition has attached to each season of the year were yet a reality on Egdon. Indeed, the impulses of all such outlandish hamlets are pagan still: in these spots homage to nature, self-adoration, frantic gaieties, fragments of Teutonic rites to divinities whose names are forgotten, seem in some way or other to have survived mediaeval doctrine. (385)

火祭り同様、五月祭も本来、異教徒の祭儀であったが、中世を通じて広く各地で盛んに行われ、宗教改革後は一時、下火になったものの、王政復古とともに隆盛を取り戻し、ヴィクトリア朝時代には、失われていた「メリー・イングランド」を熱望する風潮の高まりと相俟って、再び活気を帯びるようになる。¹⁴ このエグドンの地では「メリー・イングランド」の本能は、稀に見る活力をもって息づいており、自然の崇敬、自己崇拜、お祭り騒ぎが、中世の教義より長生きしていることが強調されている。

IV

次に、*Tess of the d'Urbervilles* と *Jude the Obscure* において、「ヘレ

ニズム」という概念を探ってみたい。ご獵場での出来事は、「経験の色に染まぬ、一個の感情の器」¹⁵ にすぎなかった十六歳の Tess を、「単純な女から、複雑な女」(T 77) に変えてしまう。私生児を産み故郷に戻った Tess は、自分自身の因襲的なものの見方や世間の目を意識する余り、不幸な日々を送るが、そのような世間の思惑を意識する心は後天的なものであり、生得のものではない。春が巡って来て、彼女のなかに人生の再出発を期する気持ちがわき起こるのは、まさに、「自己歓喜への抑えがたい本能」(T 79) によるものである。

故郷を再び後にしてトールボットヘイズ酪農場へ向かう途中、ヴァー川の流れる緑の平原が眼前に開けてくると、「どこかに快楽を見出そうとする、貴賤を問わずすべて生あるものが持っている、抵抗しがたい普遍的、自動的傾向」(T 81) が、Tess の心を支配する。彼女は「人生への熱意」(T 82) に満ちあふれて、目指す酪農場の方へと斜面を下ってゆく。牧歌的雰囲気漂うこの酪農場で、Tess が Angel のプロポーズを受け入れるのは、「飲むへの欲望」(T 149) という抑えがたい人間の衝動に打ち勝てなかったからである。だが結婚式の夜、Alec との過去を告白した彼女が Angel の顔に認めたのは、「肉を霊に屈従させようという意志」(T 192) である。

Tess の告白にショックを受けた Angel が、真夜中に夢遊病者のように彼女を抱えて外へ出るのは、知性が眠っている間に、自然の本能が目覚めたからであろう。彼は、「彼の常識が是認しない愛情を彼女に対して本能的に示した」(T 197) ことになる。このように、知性は現代社会のさまざまな教義や価値観を取り込んで、情熱が要求するもの、つまり「飲むへの欲望」に對抗しようとする。この感情と知性の二分法において、感情、特に恋愛感情は、Tess の Angel に対する無私の愛のように、人間の自然な気持ちから起こってくるものであり、一方、知性は、人間の自然な感情を歪めたり破壊したりする、文明が生み出した規範や態度の代行者になっているのである。¹⁶

ところで、キリスト教世界では普通、肉体と魂、肉体的なものと精神的な

ものとの間に鋭い区別を引く。¹⁷ この霊と肉の二元論では、霊については神からの呼びかけに応じる天上的部分であり、肉は罪のもととなる獣的な部分とされる。それ故、後者を懲らし前者を浄めることが人間の務めになる。¹⁸ このことを明瞭に示すのが、子供たちの悲劇の後、急転向した Sue の次の言葉であろう。「自分の歓楽を求めて、私たち無駄に人生を過してきたんだわ。でも、自己否定こそもっと高尚な道です。私たちは抑えなきゃならないのだわー肉を、恐ろしい肉ーアダムの呪いを。私たちは、義務というものの祭壇に、たえず我が身を犠牲に捧げていなければなりません。自己放棄、それが全てです」¹⁹ ここには、Arnold のいう「ヘブライズム」の根本観念、「克己、献身、われわれ自身の個人的意志ではなく神の意志に従うこと」²⁰ が示されている。自己犠牲と禁欲は、「自己歓喜への抑えがたい本能」の対極にあるものである。

一方、*Tess of the d'Urbervilles* の語り手は、Tess を「本能」や「直観」と結びつけることによって、彼女と自然との一体化を図り、さらにそれを女一般に敷衍する。Tess は「戸外の自然の重要な一部分」(T 68)であり、「畑で働く女は畑の一部」(T 68)である。「戸外の『自然』の形や力を主な伴侶とする女というものは、後世になって彼女らに教えられた組織だった宗教よりも、遠い祖先の異教教的な空想の方をはるかに多くその魂の中にとどめているものだ」(T 81)という言説から、女＝自然＝異教教的なものと考えられている。Tess が Angel との逃避行で最後に辿り着いたストーンヘンジは、「異教徒の神殿」(T 310)であり、そこで「故郷に戻った」(T 311)ように感じるのは、まさに彼女が異教徒であったからであろう。

さて次の作品、*Jude the Obscure* の Sue は、Phyllotson との早まった結婚から、結婚制度が人間の自然な感情をふさわしくない鋳型にはめ込んでしまうという苦い教訓を学ぶ。夫のもとを去り、Jude との自然な愛情に基づく同居生活を送るなかで、「ギリシャ的な歓喜」(J 235)に戻ったとを感じる。しかしクライストミンスターでの惨劇後は、Jude との「歓びを徳とする」

(J 268) 生き方を否定する。「＜自然＞が私たちに与えてくれたどんな本能も一文明が敢て妨害してきた本能を一楽しむことこそ＜自然＞の意図であり、＜自然＞の掟であり、存在理由なのだ」(J 268)と考えて、自己本位に耽溺してきたのは誤りであったと悔いる。

精神的に崩壊して、自己否定というキリスト教倫理へ急転向した Sue を、「なんと無残な難破船になってしまったのだ！」(J 309)と詰る Jude の言葉や、生きる屍となった Sue の、Phyllotson との再婚を、「婚礼は取りも直さず葬式じゃ」(J 316)と評する Edlin 夫人の言葉には、自己否定の生き方に対する作者の思いが示唆されているのではないだろうか。

Hardy は、「楽しもうとする意志」は人間の生得のものだと考える。“Thought of the determination to enjoy. We see it in all nature, from the leaf on the tree to the titled lady at the ball.... It is achieved, of a sort, under superhuman difficulties. Like pent-up water it will find a chink of possibility somewhere.”²¹ それは、風にそよぐ一枚の木の葉から、舞踏会の貴婦人に至るまで、生あるものがすべて持っている生得のものであるが、「楽しむことに反対する、外界の意志」(T 225)によって阻まれるのである。だがこの生得の意志は、どこかに活路を見出さずにはおれないのである。この自然な感情を拘束したり、歪めたりする外界の意志とは、社会慣習、時代の価値観、キリスト教道徳など文明が生み出したものである。この楽しもうとする人間本来の意志は、*Jude the Obscure* では、*Little Father Time* に象徴される、「生きていたくないという来たるべき普遍的な願望」(J 266)に変わるのである。このことは、現代生活の諸条件がいかにギリシャ的理想の実現を困難にしているかを物語るものであろう。

Hardy は、ヘレニズム的なものを自然なものと思なしているように思われる。もっとも「ヘレニズム」という概念は、はっきり定義されているわけではないが、現代生活やその人生観を評価する基準として考えられていると思われる。もちろん、「自然」を基準とすることには異論があろう。Hardy

は、「自然」は欠陥だらけの不完全なものと考えからである。「自然」の残酷性について Jude は、「生きとし生けるものの中の、ある一組に施す慈悲は、他の組にとっては残酷な仕打ちになる」(J 17) という自然界の恐ろしい道理を、トラウザムの畑で思い知る。このように、道徳規範としての「自然」は完全なものとして提示されているわけではない。「自然」は絶対的な基準としてではなく、社会道徳と比較した場合に、害悪がより少ないという意味で、優位が与えられているのである。²²

本論で取り上げた三作品のなかでは、現代社会に支配的な知的習慣や道徳上の価値観と比較した場合、より健全で有益な人生に対する見方としてヘレニズム的な生き方が提示されている。Hardy が *The Return of the Native* に第六部を書き加えたのは、出版事情という外圧もさることながら、エグドンに残る異教的なものを結末部で強調することにより、「ヘレニズム」対「ヘブライズム」というテーマを *Tess of the d'Urbervilles* と *Jude the Obscure* でさらに発展させて探求するためであったと考える。

注

- 1) William R. Rutland, *Thomas Hardy: A Study of His Writings and Their Background* (Oxford: Basil Blackwell and Mott, 1936) 20.
- 2) Paul Turner, *The Life of Thomas Hardy: A Critical Biography* (Oxford: Blackwell, 1998) 57.
- 3) David J. De Laura, "'The Ache of Modernism' in Hardy's Later Novels," *A Journal of English Literary History* 34 (1967) 381.
- 4) Thomas Hardy, *The Return of the Native* (London: Macmillan, 1974) 186.
以下、この作品からの引用はこの版を用いて本文中に頁数で示す。
- 5) Marlene Springer, *Hardy's Use of Allusion* (London: Macmillan, 1983) 116.
- 6) Lennart A. Björk, *Psychological Vision and Social Criticism in the Novels of Thomas Hardy* (Stockholm: Almqvist & Wiksell International, 1987) 138.
- 7) Matthew Arnold, *The Works of Matthew Arnold*, vol. 1 (New York: AMS, 1970) 236.
- 8) Arnold 85.
- 9) James Gibson, ed. *Thomas Hardy: The Complete Poems* (London:

- Macmillan, 2001) 66.
- 10) Björk, ed. *The Literary Notebooks of Thomas Hardy*, vol. 1 (London: Macmillan, 1985) entry 463 n.
 - 11) F. B. Pinion, *Thomas Hardy: His Life and Friends* (London: Macmillan, 1992) 160.
 - 12) Björk, *Psychological Vision* 140.
 - 13) John Paterson, "The Return of the Native as Antichristian Document," *Nineteenth-Century Fiction*, vol. 14 (1959-60) 123.
 - 14) チャールズ・カイトリー『イギリス祭事・民俗事典』(大修館, 1992) 240-41.
 - 15) Hardy, *Tess of the d'Urbervilles* (New York: Norton, 1965) 8. 以下、この作品からの引用はこの版を用いて本文中に頁数で示す。
 - 16) Björk, *Psychological Vision* 141.
 - 17) H. D. F. Kitto, *The Greeks* (Penguin, 1951) 173.
 - 18) 原佑、岩田靖夫、伊藤勝彦、渡辺二郎 『西洋思想の流れ』(東京大学出版会, 1971) 65.
 - 19) Hardy, *Jude the Obscure* (New York: Norton, 1978) 272-73. 以下、この作品からの引用はこの版を用いて本文中に頁数で示す。
 - 20) Arnold, *The Works of Matthew Arnold*, vol. 6 (New York: AMS, 1970) 124.
 - 21) Florence E. Hardy, *The Life of Thomas Hardy* (London: Macmillan, 1962) 213.
 - 22) Björk, *Psychological Vision* 113.